

## 原 慶明：アジア太平洋藻類学連合国際シンポジウム 「21世紀の藻類学に向けて」実施報告

6月22日～25日に、山形大学理学部先端科学実験棟を会場としてアジア太平洋藻類学連合国際シンポジウム「21世紀の藻類学に向けて」(International Symposium of Asian Pacific Phycological Association 「Phycology Toward the 21st Century」)を実施した。予め日本を含めたアジア太平洋地区から21世紀前半に藻類学のそれぞれの分野で活躍が約束される研究業績と研究の発展性をもつ若手・中堅研究者にオリジナルな研究成果に基づく講演を、APPAの運営委員と役員には21世紀の藻類学を展望するための基盤として、それぞれの国の藻類学の実情の総括もしくは自分の研究分野の動向と将来について総説的にまとめた講演を依頼し、また基調講演として中国科学アカデミー青島海洋学院のシニア教授であるC.K.Tseng氏に依頼し快諾を得て開催に望んだ。

6月22日：受付とポスターの貼り付けを開始し、第1回APPA運営委員会を開催した。委員会終了後、山形市内の割烹にて運営委員会出席者および海外からの招待講演者を交えNight Session(歓送会)で旧交を暖めた。

6月23日：Opening Ceremonyでは最初に山形大学理学部長(代理)斎藤和男氏と日本藻類学会会長原慶明からの歓迎挨拶で口火が切られ、APPA会長In Kyu Lee氏(ソウル国立大学)から開会宣言があり、それに引き続きシンポジウムを開始した。若手招待研究者による講演20題(セッション1-5)の発表があり、その後山形大学構内の厚生会館食堂にて懇親会がおこなわれた。

6月24日：Tseng教授による基調講演に引き続き中堅招待研究者による講演12題と一般研究者による展示発表14題、他にAlgal Art展示、中堅招待講演者・APPA役員による講演9題が行われた。Closing Ceremonyでは第1回APPA運営委員会会議報告が運営委員会委員長川井浩史氏(神戸大・理)より、また閉会の挨拶がAPPA会長(代理)Jeong Ha Kim (APPA庶務幹事, Sungkyunkwan大学)より、さらに3rdAPPF(Algae2002)の案内が準備委員長井上勲氏(筑波大・生物科学)よりあり、つくばでの再会を期して散会した。その後、若手有志によるStudent Nightが大学近傍で開催された。

6月25日：早朝エクスカージョン(河北町さくらんぼ農園, ひなの湯温泉)に出発、荒天にもかかわらず欠席者はほとんど無く、山形のサクランボと温泉を楽しんだ。

Tseng教授から93歳の高齢にもかかわらず「我々は(21世紀には)海洋農業を推進しなければならぬ—1研究者の提案—」の熱の入った講演をいただいた。また若手研究者の講演、特に日本人の講演は英語による発表のハンデを乗り越え、内容及び論旨の進め方、研究程度の高さに驚かされたという感想が寄せられた。J.A. West氏からは過去5年間にいろいろな国際集會に参加した中で最も素晴らしい内容であった等、同じような賛辞がAPPA会長およびドイツの招待講演者からもあったことを報告したい。

今では土産話となったが、大会3日目の猛暑の日に約1時間にわたってエレベーター内に数名の参加者が閉じ込められるというアクシデントが発生した。その中に最高齢者のTseng先生とTrono先生がおられるとの由。当日は休日であることでもあり最悪の事態を想定し、消防署と警察署の救助要請の許可を大学から得て待機した。幸いエレベーターに詳しい事務職員の機転により無事開放されたので大事には至らなかった。準備段階で、山形大学理学部内には英語の表示がほとんど無いことに気づいていたので、英語の案内表示に腐心したが、エレベーター内まで注意が行き届かなかったことを反省している。

これまで基礎藻類学と応用藻類学は日本はもちろんアジア諸国及び世界レベルの学術集會でも国際会議は分かれており、それぞれの分野の研究者が一堂に会する機会はほとんど無かった。このAPPAの組織そのものも例外ではなく、基礎藻類学に携わる研究者が多いので、今回招待講演者を選ぶ際に意識的に応用藻類学者を優先した。その効果は日本、韓国、マレーシア、フィリピンなどの同国研究者間にも新たな研究交流の場ができた点を指摘しておく。

本シンポジウムの開催には来年つくば市で行われるAPPAの本会議第3回アジア太平洋藻類学連合フォーラムの運営連絡の場の提供という役目をになっていた。第1日目にそのための会議を開

催したが、その役割は果たせたと思われる。また、今回のAPPA及びその活動は、分極化し始めている斯界のトレンドの中で、アメリカ・カナダ、中・南米諸国を中心とした勢力と欧州連合を中心とした勢力に匹敵する第3の勢力として位置固めができたことも成果のひとつであろう。

会期中の延べ参加者数は日本以外12カ国23名、合計94名であった。このように盛会裏にシンポジウムを終了できたのも、日本学術振興会、山形県、山形市、日本藻類学会より補助金、後援



会場にて。左から Phang, Nelson, West, Karsten 博士。

を受けたこと、山形大学理学部、山形コンベンションビューロー、大風印刷、東急観光より物心両面で助力いただいたことに依る。ここに記して感謝申し上げる。

シンポジウムの準備などは準備委員会幹事として原慶明、川井浩史、河地正伸(日本代表APPA運営委員)、本村泰三(JSP英文誌編集委員長)、菱沼佑(JSP庶務幹事)、半沢直人(JSP会計幹事)、R. Jordan(山形大・理・地球環境)が、準備委員として横山亜紀子・近藤貴靖・Moat War Dai Naw・保科亮・土屋英夫・工藤創・梶川牧子・比嘉敦・谷藤吾朗・越智昭彦・宮丈仁・近野麻里・中場静江・植松隆行・佐々木政紀・佐藤潤・大泉春樹・佐藤崇史・山形大輔・木下佳子・佐藤恵(以上、山形大・理・生)、谷本舞子・大山緑(山形大・理・地球環境)、内田英伸(山形県企業振興公社)、長里千香子(北大・院)、山岸隆弘(東北大・院)、坂山俊英(東大・院)守屋真由美(筑波大・生物)が担当した。

(山形大・理)

## 寫田 智：アジア太平洋藻類学連合国際シンポジウム 「21世紀の藻類学に向けて」参加記

平成13年6月22-25日の4日間、上記シンポジウムは日本の最高気温40度8分の記録を持つ山形市の山形大学理学部において行われました。講演は23、24日で、内容は4部よりなり、1部は若手研究者によるオリジナルな研究成果に基づく講演、2部は中堅研究者による21世紀を展望する藻類学の総説的講演または先進的研究についての講演、3部はAPPA委員・役員の研究紹介講演、それに加えて4部は一般参加の研究者による展示発表でした。

Session 1: 大型藻類の分子系統について、3人の若手研究者が講演を行いました。私もこのセッションに入っており、拙い英語でアオサ・アオノリの分子系統学的解析についてお話しさせていただきました。質問は、かのJohn A. West氏からいただいたのですが、はじめ何を聞かれているのかさっぱりわかりませんでした。「もう一度お願いします」と言うと、ゆっくりと質問していただけてなんとか聞き取れ、無事に「Both!」と答えることができました。意志疎通のための英語力の必要

性を改めて痛感しました。

Session 2: 休憩を挟んで微細藻類の分子系統について4つの講演がありました。若手ナンバーワンで憧れの的である中山さん(筑波大)の講演はとてもきれいなPowerPointでのプレゼンテーションで、微細構造と分子系統学的解析とのデータを比較し、緑藻の系統進化についてお話してくださいました。このセッションでは最後に守屋さん(筑波大)がPowerPointでストラメノパイル生物の動画を2度披露してくださいました。私にとってなかなか縁がない生物群の動く姿を見ることができ、感動しました。

Session 3: 昼食後、藻類を扱った細胞生物学と細胞遺伝学についての講演が行われました。私と同じく山形大学理学部生物学科出身の長里さん(北大)の講演はとてもすばらしく、切れの良い英語と美しいスライドで聴衆を魅了していました。

Session 4: 休憩後、応用藻類学と題し4つの講演がありました。澤辺先生(北大)、水田先生(北大)、そしてChu氏(マレーシア国際医科大)の